

⑩ 日本国特許庁 (JP) ⑪ 特許出願公開
 ⑫ 公開特許公報 (A) 昭62-49838

⑬ Int. Cl.
A 61 B 10/00

識別記号 廣内整理番号
103 E-7033-4C

⑭ 公開 昭和62年(1987)3月4日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑮ 発明の名称 生換用鉗子

⑯ 特願 昭61-128277

⑰ 出願 昭61(1986)6月4日

優先権主張 ⑱ 1985年6月4日 ⑲ フランス(FR)⑳ 8503386

㉑ 発明者 ジャン-マリー シン フランス国 パリ 75116 アブニュー ピクトル ウゴ
トゲン 45

㉒ 発明者 ブルン ゼタン フランス国 パリ 75655 リュ デュバンダン 23

㉓ 出願人 ジャン-マリー シン フランス国 パリ 75116 アブニュー ピクトル ウゴ
トゲン 45

㉔ 出願人 ブルン ゼタン フランス国 パリ 75655 リュ デュバンダン 23

㉕ 代理人 弁理士 関根 秀太

四月 紙面 三

3. 発明の詳細な説明

本発明は、シースの一端でリンクロッドに各開節状に接合されたスプーン又はあご部材から成る生換用鉗子に係わるものであり、該リンクロッドはシース内を貫通するワイヤと一体を成しており、シースの端部に位置する把手によりコントロールされる。

針はスプーン又はあご部材の間に位置する。

公知の生換用鉗子においては、生換棒本の採取部位を決めるために用いる針は二個のあご部材の間に囲みられており、生換で「知能になる」場所を占めることになる。

更に公知の生換用鉗子はあご部材がお互いに並なるように連結し、各あご部材の切頭端に向している端部はリンクロッドと接合している。二組のリンクロッドはシースの各端部でメインロッドと接合し、シース内を貫通するコントロールワイヤに固定されている。この種の公知装置は、二つのあご部材と、メインロッドとは一点だけで接合しているリンクロッドとが形成す

1. 発明の名称

生換用鉗子

2. 採択請求の範囲

(1) シースの一端でリンクロッドに各々連結されたスプーン又はあご部材 2 個から成り、該リンクロッドはシース内を貫通するワイヤと一体を成すように連結しており、シースの反対端に位置する把手のコントロールをうけ、あご部材の間に針が位置する生換用鉗子において、該コントロール リンクロッド(9,10)が抜打(5)に連結し、あご部材(3,4)がその上を針(5)の長手穴(8)が通る固定袖(?)に連結することを特徴とする生換用鉗子。

(2) 打(5)に横方向切欠部(12)が設けられたことを特徴とする特許請求の範囲第1項に記載の生換用鉗子。

特開昭62-49838(2)

る並行四辺形が頂点を中心にしてのみ近くことが出来て生抜の精度、効率といった点で欠陥があつた。更に、極く小さい部材を組立てるので、細かい手作業を必要とした。

本発明による鉗子は、簡単な構造を有し、鉗子を閉めていても針が引き出し可能であるので、前述した公知の鉗子の欠点を取り除くことができる。あご部材は鉗子を開閉している際には操作できない。

上記目的を達成するため、本発明による生抜用鉗子は下記の主要な特徴を有する。即ち、リンクロッドは針と連結しており、あご部材は針の長手方向穴が動く固定軸に連結されている。

鉗子を閉じた時に粘膜内への針の進入を容易にするために、本発明は鉗子に横方向の切り欠き部を設けることを配慮した。

本発明の理解の一助とするため、本発明鉗子の一実施例による切削端を示す添付の図面を参照しながら以下に詳細な説明を述べる。

生抜用鉗子は、シース(1)一筋、シース1内

を貫通し、切削端部に対応する(図面の通り)端部に設置するハンドル(図示せず)によるコントロールをうけるワイヤ(2)から成る。シース1内を操作し、ハンドルによりコントロールをうけるワイヤ(2)は、スプーン又はあご部材(3,4)を互いに旋回させる。スプーン又はあご部材(3,4)は各自回みぞ部(3',4')を有する。鉗子を閉じると、これらの回みぞ部(3',4')により生抜の量が決定される、針(5)を用いて生抜標本採取の際にあご部材を固定する。

上記の本発明実施例によると、ワイヤ(2)はシース(1)に固定したスリーブ(6)内に位置する針(5)の後部に一体となって固定される。

あご部材(3,4)は、その長さの中央附近でスリーブ(6)と一緒にリベット(7)に接合し、その上を針(5)の長手方向穴(8)が移動する。回みぞ部(3',4')の反対側ではあご部材(3,4)各々リンクロッド(9,10)に接合されている。リンクロッド(9,10)は、あご部材(3,4)の反対側で針(5)に面着したりベットから成る共

通孔(11)に接合する。

ワイヤ(2)をすべらせると、針(5)と一緒に軸(11)と一緒に引張ることになる。あご部材(3,4)は開口不(8)が通っている固定軸(7)のまわりを旋回する、ワイヤー(2)を牽引することにより、あご部材(3,4)から成る鉗子が回り、針(5)は回みぞ(3',4')が形成するスペース内に殆ど完全に入ってしまう。この状態では、生抜量は最大となる。

2ヶ所(7,11)で密にされるあご部材(3,4)は、公知の生抜用鉗子と違ってワイヤ(2)の軸のまわりを回転することはない。

前述の鉗子の組立は、公知の鉗子とくらべて容易であり且つ時間がかかるない。更に公知の針つき生抜用鉗子と比較すると本発明による鉗子では、針と主要ロッドとが一体化されており、部品の数が一つ少なくなる。このため、組立、固定化、切削作業が省略される。従って、本発明による生抜用鉗子は公知の鉗子とくらべて廉価である。

本発明の好ましい実施例によれば、本発明は針に横方向切欠部(12)をあけたことに着目した。針(5)を引っ込めると、あご部材(3,4)が閉まり、あご部材の別側端部は粘膜内に進入して生抜標本を採取、切欠部(12)は針(5)が粘膜外へ出るのを妨げる。これにより鉗子の粘膜内への進入が容易になり特に粘膜の抵抗が強い時には、生抜採取を容易にする。

4. 図面の簡単な説明

第一図は、本発明による生抜用鉗子の一実施例を示す。

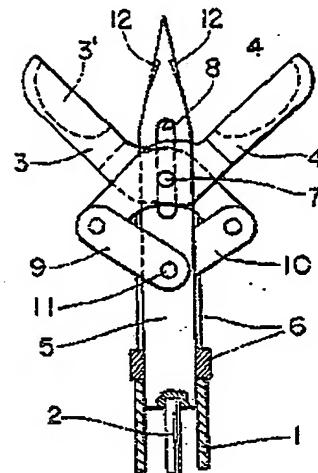
図中 1……シース 2……ワイヤ
3, 4……スプーン、あご部材
3, 4……回みぞ部

特開昭62-43838 (3)

5 ……針 6 ……スリーブ
 7 ……リベット 8 ……開口部
 9, 10 ……リンクロード
 11 ……共通軸 12 ……切欠部

図面の添付(内容に変更なし)

特許出願代理人 兼 理 力 大



特許出願番号 昭和61年128277号

昭和61年9月19日

特許庁長官署

7. 指正の対象

- (1) 代用性を証する書面
- (2) 指正な図面

各1通
1通

8. 指正の内容

別紙の通り

1. 本件の登録 昭和61年特許第128277号

9. 送付状類

- (1) 契約書及び同文書
- (2) 図面

2. 発明の名前 生検用器具

3. 指正をする者

事件との関係 特許出願人

名 称 ヴィンマリー シントゲン(他一名)

4. 代理人

住 所 107 東京都港北区山下町1丁目2番3号
羽山ビル410 電話 403-5281

氏 名 (8262) 兼 理 力 大

5. 指正命令の日付

起算日 昭和61年8月6日
発送日 昭和61年8月25日

6. 指正により増加する発明の数 0



THIS PAGE BLANK (USPTO)